

活動の概要

昨年度に引き続き、身の回りのさまざまな事柄に対して「金銭的なコストを掛けず実現する」という実践を行っている（活動の一部を後述）。これらは「一般的には、商品として購入したりサービスに浴する」であろうことを「(敢えて) 自分の手で作ってみる、自分自身でやってみる」と言い換えられる部分が多い。また、不要品を活用することや、不要となるもの（いわゆるゴミ）を減らすこととも連続的な思考であった。プロジェクトでのフィールドワークからは、「廃棄物が処理される実際」をごく一部ながら知ることで、「実践できる循環」を増やせる可能性を感じ、自身の活動として取り入れた。このような姿勢は「資本主義経済の下で高度に最適化された生活スタイル（サービスを受けること、物品を購入すること）に依存しすぎないための試行」とも解釈できる。これら活動について取材を受ける機会も得た。

学内での活動

1 委員会等

システム、入試実施、発明等審査の各委員会にて、委員として各委員会の運営にあたった。

2 授業

次の各授業を担当した。メディア表現基礎 3、メディア表現基礎 4、制作基礎（情報工学）、情報工学演習、プロジェクト実習（福祉の技術プロジェクト、Community Resilience Research、体験拡張表現プロジェクト）、特別研究。一部授業の詳細を以下に記す。

2.1 メディア表現基礎 4（主担当）

山田晃嗣、吉田茂樹、三輪眞弘との共同授業。外部講師として、本学卒業生の伏田昌弘氏を迎え、「情報技術とコミュニケーション」をテーマとした授業を行った。新型コロナウイルスの蔓延により制約を受け、分断されたコミュニケーションを振り返りつつ、そのような中でも、最低限の社会生活を実現させたオンラインツールに焦点を当てた。前半では、ある時代区分での感染症対策を考え、これにより現在のオンライン技術があつてこそ、ようやく今の生活が成り立っていることを再認識した。後半では AR 技術を具体的な道具として、これまでの経験を踏まえた上で、あり得るオンラインコミュニケーションを試作、提案する内容とした。

2.2 プロジェクト実習：福祉の技術プロジェクト（分担）

大垣特別支援学校の防災教育に年間を通じてアドバイス、協力した。スマホでの AR アプリを用いた大雨体験やドールハウスを用いた洪水の体験などを提案し、授業での実施に至った（写真右）。本取り組みは支援学校が外部資金を得て推進しており、当該財団による奨励賞受賞に至った（採択 75 校中 11 校が受賞）。

また昨年に引き続き、「気軽に情報交換できる場所」をオンライン形式で開催・参加した。近隣地域の支援学校や福祉施設、福祉に関心のある人の参加が継続的にあり、年度中 30 数回を開催できた。本会を通じては、池田町の福祉施設に対して継続的に支援しており、利用者の作品展示へのアドバイスや VR ゴーグル (Quest2) の利活用を目指して、体験会を開催するなどした。

オープンハウスではメンバー4人がそれぞれに防災をテーマとした実践を行い、これらをオンラインにて同時並行で中継した（写真右下）。「被災を想定した状況で、手軽に美味しいものを作る」という内容が大多数であった。自身も冷水でカップ麺を作ってみるとともに、自作のストーブで炭を焼き濾過装置を試作してみた。また防災に関連する取り組みとして、畑に設置した雨水タンクなどを紹介した。防災士の資格を持つ参加者からの活発な質疑が行われた。

卒展（修了研究発表会／プロジェクト研究発表会）では、当年の活動を一覧にまとめ、バナーと動画にて紹介した。



ARでの大雨体験（上）／

ドールハウスでのAR洪水体験（下）



オープンハウスでの防災活動中継



卒展の様子（福祉の技術プロジェクト）

2.3 プロジェクト実習：Community Resilience Research (CRR/分担)

岐阜県本巣市の根尾地区を主な対象として、過疎に直面しながらも今なお力強く続けられている暮らしのあり方に、未来へのヒントを探るべく活動している。自身が特に関与した活動を以下に紹介する。

古民家解体の調査（写真右）：根尾の地域では、多くの家屋が住人を失い朽ちつつあり、それが一つの風景にもなっている。ところが、まだ住めそうな山際の一軒家が重機によって丁寧に解体されている現場に遭遇し、これがとても不自然に感じられた。金銭的コストを費やしてまでも解体を依頼した施主の想いや、解体前後の木材等の行方を追った。調査を通じて、木材の植林から循環までの大きな流れが見えてくるとともに、廃材処理の実際を幾分か知ることができた。卒展（写真下）では、この内容をパネルと動画で展示した。また、この活動をきっかけに、リサイクル業者が発行するフリーペーパーから取材を受けた。

くすりの博物館の調査：歴史的厄災や医学、薬学の変遷について展示されていた。同館の畑や温室では、薬として利用できる植物が多数育てられており、ごく身近な「雑草」とされる植物であっても、かつては重宝されていたことを知った。見学を経て関心を持った学生とともに、葛餅に使われるクズの蔓や根を採取、加工などした（写真右）。どこでも見かけるが雑草としか見えていなかった植物への印象が大きく転換した。

その他の活動：春日森の文化博物館のリニューアルにプロジェクトとして協力し、森の生き物を題材としたスタンプラリーを共作した。前年度に行なった「盆踊りのCG表現」に関して、お祭りを扱うメディアからの取材を受けた。



古民家解体に関する展示



クズの蔓で編んだカゴ



卒展の様子（CRR）

学外での活動・個人の活動

1 森のアートプロジェクト（分担）

本巢市根尾小学校で行ったワークショップ。子どもたちは数人ずつ4つの班に分かれ様々なカメラ（ドローン、全方位カメラ、ジンバルカメラ、一眼レフカメラ）を活用し、根尾地域の豊かな森林をそれぞれの感性で撮影した。自身はドローンチームを担当した。子どもらは難なく操縦方法を会得し空撮ならではの撮影を楽しんでいた。

2 個人としての活動

2.1 卒FITした太陽光電力の活用

2011年中旬に設置した太陽光発電施設が再生可能エネルギーの買取制度を終了したため、より効果的に電力使用できるよう敷地内の配線や受電契約を変更した。これまでは母屋と離れを二世帯としてそれぞれに受電していたが、太陽光による電力の自家消費を増やせるようにしたものである。施工や申請手続きを自身で行なった。今後さらに防災視点からの活用方法も模索したい。

2.2 有用植物の活用

プロジェクト活動でも記したとおり、クズの採取、活用を行った。蔓でカゴ編み、くず粉を精製、残った繊維で紙漉きなど実践した。自家栽培した稲藁でも草履を編んだりしてみた（写真右上）。それほど遠くない過去の時代まで営まれていた「真に自然と共存する生活スタイル」を想像しつつ、祖先が時間を掛けて会得し世代を超えて伝えてきた知恵を感じた。また両親やその親世代の生活を聞く機会にもなった。

2.3 生活に密着した活動

全長4m、幅2m、水深20cmほどの簡易プールを作った（写真右）。板材で型枠を作りブルーシートを被せた簡単なもの。使用した水は畑の散水に利用した。木の棒を支柱としてブルーシートとロープで日除けのテントとした。形態の異なるテントも複数設営し、ロープワークやブルーシートを用いたテントの設営を経験できた。

IAMAS で不要となったビニールを再利用し、飛沫防止のパーティションや小型の温室を試作した。パーティションの枠部分は2.5mm厚のMDFをレーザー加工。学習塾で利用されている（写真右）。温室は植物の越冬や種苗後の発芽促進に使用している。

畑で銀杏がたくさん採れるようになってきたため、果肉を効率的に取り除く処理を試行した。高速回転できる電動ドリルにL字の金属棒を取り付け、水中で攪拌することで効率良く処理できた（事前



試作した藁草履



簡易プールと日除けテント



飛沫防止パーティション

に一晩ほど浸水しておくといよい)。銀杏は朝市等でも販売した。

手持ちの培土器（畝を作る装置）を、管理機に取り付けるためのヒッチ（取り付け金具）を製作した。ありものの鉄材を加工、溶接して仕上げた（写真右）。

庭木の剪定クズをチップ加工し、すでにある堆肥と混合し堆肥化させた。畑のマルチング（保温、抑草）および土壌改善の目的で利用している（写真右下3枚）。チップ加工には、町内のエコステーションでエンジン式の破碎機を安価に利用できた（軽トラに山盛りの枝木が1時間で処理でき、すりきり程度の量になる）。通常であれば施設での焼却処分が必要であり、処分費用も運搬時間（往復1時間）も掛かる。フィールドワークで得た知識の活用でもある。

先端が広がった歯ブラシの再生を試みた。レーザーカッターで櫛状の補正治具を作り、これを取り付けたまましばらく熱湯に浸す。見た目と使用感が回復することを確認した（歯ブラシ再生を「お勧めしない」というウェブ記事も見つかる）。

2.4 活動の考察

2012年頃から開始した実践的な活動は、一般的には不良資産とされる農地の価値を見出すことを起点としたものであった。その後、活動の幅を広げるにつれ、あらゆる活動が有機的に相互に関連していることを実感する。庭木を堆肥化し畑で活用する取り組みは、その典型的な一例と言える。モノだけでなく知識や技術についても同様に、本来これらは高い汎用性を持つのである。しかしながら現在の高度に最適化・専門化された生活の中では、それぞれが接点を持つ機会ごく少なく感じられる。2020年度開始のCRRでの活動を通じ、自身の関心はより広い持続的な生活様式を探究・実践するとともに、文明社会との距離感を見つけることであると再認識した。今後さらに活動事例を充実し、これらの関係性や一般性などを分析してみる。

3 その他の活動

- ・ 地域の福祉委員（会計担当）
- ・ 補助金 書面審査業務



自作した培土器ヒッチ（取り付け金具）



ウッドチップと堆肥